

観音物語(2) 変化自在

具足妙相尊 偈答無尽意 汝聴観音行 善応諸方所

妙相を具足したまえる尊は 偈をもって無尽意に答たまふ 汝聴け 観音の行は善く 諸の方所に応ぜん

釈迦牟尼仏はものしずかである。静謐にして靈妙なる尊容は周囲に温かい心を抱かせる。端座しているだけで、大衆はえもいわれぬ安心につつまれてしまう。

くわえて、説法が始まれば、世尊の声が全身にしみわたり、仏と自分が一体になる。この時、この場で、釈迦牟尼仏とともに過ごすということは、最高に贅沢な縁につながり、深い幸福感につつまれる。これを恍惚というのだろう。

「無尽意よ、よく聞きなさい」

釈迦牟尼仏は、あえて無尽意菩薩に問いかけた。

無尽意は観世音菩薩のことを一番よく理解しているからである。知っただけでなく再度の説法を求めてきた。その意味に、世尊は感服した。だから期待に応えるのである。つまり無尽意は、ここにいる八万四千の大衆に、観世音菩薩は自分自身のことであるということ、今ここではっきりと自覚してほしいのである。

世尊は無尽意の真意を見抜いている。無尽意の希望は、全体への問いかけであることも。

「無尽意よ……」

八万四千の大衆は固唾をのんで耳を傾けた。

「観世音菩薩は、四方八方に慈悲の眼をそそぎ、ひろく世間の動きを見つめている。うめき声に耳を傾け、その苦しみの原因を透視して、人々の願いを的確に応じていく。観世音菩薩は、瞬時にして十方世界に赴き、衆生を済度することが第一目的である。これが観世音菩薩の永久の修行である」

釈迦牟尼仏は、観世音菩薩の神足通を褒めたたえた。

現代の仏教寺院にも、大小さまざまな観音像が奉安されている。街のどこかで、村のどこかで、近所のどこかで、必ず観音さまを拝むことができる。一般家庭の床の間や棚にも、飾りとして観音像を安置することが多い。像の材質も、木材、金属、陶器、象牙、宝石、プラスチックなど、各種ある。日常生活の周辺に、つねに観世音菩薩がおられれば安心が得られ、苦しみも、心配ごとすべてお任せすることができるからである。

このような観音信仰の形態は、日本に限ったことではない。中国でも、インドでも、タイでも同じことである。仏教寺院がある地域には、必ず観音像が奉安されている。

「世尊、観世音菩薩の上品なお顔、柔和な容姿は、女性でしょうか？」

「もともと観世音菩薩は口髭をたくわえた古代インドの神である。荒ぶる神のなごりが口髭である。その神が悪魔を退治する勇猛な菩薩になっていったのである」

なるほど、金龍寺の大観音をよく拝見すれば、口のまわりには髭の痕跡がある。観世音菩薩の本名は「アバロキテイシュバラ」という。これは男性名詞の呼称である。

「世尊、それではなぜ観音さまは女性の姿をなされているのですか？」

「慈愛の眼差しを思い浮かべるがよい。とくに中年の婦人は育児を終え、なおかつ家族の細かいところまでしっかり眺めて、いろいろな気配りをしているのではないか。婦人のあのきめ細やかな観察は男には真似ができない。ひとりひとりを救うために、観世音菩薩はあえて優しい女性の姿をとっているのである。無尽意よ、男の注意力で家族の心配に気づくことができるかな？」

「男にはできかねます。子どもは父親からすぐ離れていってしまいます。女は柔らかく、男は硬いのです」

「そうであろう。女の注意力は繊細である。直観が鋭い。忍従もできる。化粧をして化けることもできる。妬みも強い。旦那の嘘を見破る眼力がある。女心は深いぞ。あなどれば怪我をするぞ」

会場が爆笑した。観世音菩薩は男の働きもするし、女の役目も果たす。性別を超越した慈悲の仏である。婦人の姿をしているのは方便であることが理解できた。

観世音菩薩はあらゆる人々の願いに応じて姿を変える。聖観音、千手観音、十一面観音、馬頭観音、如意輪観音、准胝観音、不空縹索観音、さらには白衣、楊柳、魚藍、水月、多羅、蛤蜊、子安観音など、名前をあげれば切りがない。これも方便である。変化自在の尊容から、仏の教えが民衆に融けこんでいく大きな信仰エネルギーを感じることができる。

もしかすれば、観世音菩薩は化け物かもしれない。